

Title	新抄物の漢語と日本語の変化
Author(s)	聖学院大学総合研究所
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.13, No.5, 2004.3 :19-22
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5492
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

抄物の漢語と日本語の変化

小林 茂之

1. はじめに

古代語から近代語にかけての日本語の変化の中で、格助詞に関する変化は大きなものの一つである。つまり、「が」「を」「に」などは、現在の日本語では名詞に付くのが当然のことのようであるが、古代語では文中の名詞は必ずしも常に格助詞を伴っていたのではなかった。

では、なぜ日本語では、文中の名詞が必ず格助詞を伴うようになったのだろうか。一つの仮説として、漢文訓読の影響があると言われている。ご存知のように、中国語は日本語と語順が異なっていて、目的語は動詞の後にくる。したがって、漢文を日本語で読む、つまり訓読しようとする、目的語を動詞より先に読まなければならない。そこで、返読が行われるようになったのだが、その場合、語順を変えるだけでなく、名詞のあとに格助詞「を」などが必ず読み添えられるようになったのである。

「を」については以上のような推測が可能であるが、主格助詞は返読の必要はないので、訓読法に帰することは難しい。しかし、主格助詞の場合も漢文訓読とは無関係ではないと考えられる。つまり、漢文訓読を通じて取り入れられた漢語が文法の変化の原因となったと考えることは可能である。なぜなら、漢語は、本来外国語であって、文法面で生

粋の和語と同じであるかどうか自明ではないからである。

この小稿では、漢語動詞が抄物を通して中世の日本語の文法の変化に与えた影響を主格助詞についてとりあげるとともに、抄物中の漢語の日本語の動詞として取り入れられた姿を具体的に示そうと思う。

2. 初期抄物における主格助詞

主格助詞は、中世において現在のように原則的には表出されるようになった。小林(2000)では、鎌倉期の『平家物語』と室町期の『天草版平家物語』とを比較することで、この変化について論じた⁽¹⁾。しかし、資料間の時代の隔たりが大きいために、変化の過程の詳細が明らかになったわけではない。そこで、室町初期の抄物⁽²⁾を資料として、変化の初期の過程を検討しようと思う。

中世は学術活動が盛んな時代であった。その産物として、抄物と呼ばれる文献がある。これは、一般に漢文に対する口語性の高い言葉で書かれた注釈書である。小稿で資料とした『応永二十七年本論語抄』はその最初期の文献である。

その巻一～四⁽³⁾における主語名詞句に関して、無助詞 ϕ ⁽⁴⁾、主格助詞「が」「の」⁽⁵⁾、主題助詞「は」

表1 『応永本論語抄』における主語名詞句の助詞表出と述語の語種

述語	ϕ	が	は	の	合計 (S)	が+/の/S%	は/S%
和語	150	122	185	84	541	38.08	34.20
漢語一字サ	15	21	12	16	64	57.81	18.75
漢語二字サ	11	10	14	6	41	39.02	34.15
形容詞	39	10	13	10	72	27.78	18.06
形容動詞	19	7	23	10	59	28.81	38.98
名詞	45	8	308	4	365	3.29	84.38
あり・ある	158	6	7	15	186	11.29	3.76
なし・ない	89	0	11	6	106	5.66	10.38
その他	27	5	82	3	117	6.84	70.09
合計	553	189	655	154	1551	22.11	42.23

う一節を例に取ることにする。これは、現在では「君子徳を懷(おも)い、小人士を懷(おも)い」と読んで、「懷」に対して「おもふ(う)」と訓をつけている。

ところが、中田(1976)のp.200では「懷」にレハと送り仮名が附せられている。つまり、「おもふ(う)」とは読めないのである。実は中世では「やすんず(る)」と読まれていたのである。

この箇所は清原宣賢系の論語抄とされる⁽⁸⁾京都大学本『魯論抄』⁽⁹⁾には、

(論語) 正義ノ心ハ君子ガ徳ヲヤスンズレバ小人ガ土ヲヤスンズル (『魯論抄』一巻59ウ)

とある。また、『文明本節用集』においても、論語のこの箇所が引かれていて、「懷」に「やすんず」という訓を附している。

したがって、中世では博士家において「懷」を「やすんず(る)」と読んでいたのであるが、『角川大辞源』によれば、近世の古訓には「やすんず(る)」は挙げられていない。

一方、『日本国語大辞典』においては、「やすんずる」の他動詞の意味を

- (1) 安らかにする。やすめる。安んじる。
- (2) 甘く見る。軽く見る。あなどる。安んじる。

と記述している。これらの意味は『論語抄』の「懷」の意味とは合わないと思われる。したがって、「懷」の訓は「やすんず(る)」であっても、それは本来の和語の意味を離れ、対応する漢語の意味をもった訓としての和語になっていたのである。

つまり、中世の「やすんず(る)」は漢語と強く結び付いた言葉であって、語構成的には和語であるが、漢語的な語に分類されるべきだと考えられるのである。そして、それは、中世の漢文注釈活動の中で生まれ、その衰退とともに消滅した言葉なのであろう。

4. おわりに

小稿では、中世において、漢語動詞が、初期抄物の言語を通して、主格助詞の表出を先導したという見方を示した。その後の変化や他の和語動詞への影響については、別稿で論じることにした。筆者は、言語史研究においては、言語の体系的変化のメカニズムを常に視野におくことが大事だと考えている。そして、史的資料に恵まれた日本語は、言語変化の理論にとって貴重な言語なのである。

註

- (1) 小林(2000)は、非対格動詞の述語の場合に無助詞から主格助詞表出へ変化したことを論じた。

非対格動詞とは、次例のように、主語が動作主・経験主とならない自動詞である(『平家物語』は『日本古典文学大系平家物語上』、『天草版平家物語』は亀井・坂田(1966)の翻刻による。)

- (i) a. 上古にはか様にありしかども事~~い~~い
こず、末代いかゞあらむずらむ。おぼつか
なし」とぞ人申ける。(『平家物語』)
- b. 上古にはかやうのことがござったれど
も、事~~い~~いできなんだが、末代にはなんと
あろうぞと言うて(『天草版平家物語』)

(i) aでは、主語が無助詞であるが、対応する(i) bでは、主格助詞「が」が表出されている。なお、非対格性を上述したように、述語のとり項の意味役割として分析の枠組みは、Bresnan and Zaenen(1990)を参照されたい。

- (2) 抄物とは中世につくられた日本語による漢文の注釈書である。詳しくは、大塚(1995)を参照されたい。
- (3) これは、称光天皇宸翰の部分である。
- (4) 無助詞の主語名詞句は、無助詞主格と無助詞主題に分かれるが、ここでは区別しない。この区別に関する問題は、小林(2004)で論じた。

- (5) 「の」は古代語では主格助詞としては「が」よりも優勢であって、近世において、現代語のように属格専用の助詞となった。
- (6) Miyagawa (1989) は、対格助詞「を」の表出への変化の原因を終止・連体の合流と考えている。ただし、著者は、Miyagawaのような格理論を前提にしていない。
- (7) 坂詰 (1977) は、「注す(る)」が中世古辞書類にないことを指摘している。
- (8) 小林 (1977) は、この系統の本について詳しく検討している。
- (9) 坂詰 (1984) に影印、坂詰 (1987) に索引が収録されている。

参考文献

- Bresnan, J. & Zaenen, A. (1990). Deep Unaccusativity in LFG. In *Grammatical Relations: A Cross-Theoretical Perspective*, pp. 45-57. CSLI.
- Miyagawa, S. (1989). *Structure and Case Marking in Japanese*, Vol. 22 of *Syntax and Semantics*, chap. 6, pp. 199-246. Academic Press.
- 大塚光信 (1995). 「抄物概説」. 『中華若木詩抄湯山聯句抄』, 新日本古典文学大系, pp. 557-578. 岩波書店.
- 小林茂之 (2000). 「中世における主格助詞表出の一変化について」. 『国語と国文学』, 77 (12).
- 小林茂之 (2004). 「中世日本語における主題と主格—朝鮮語との対照の観点から—」. 『緑聖文化』, 2.
- 小林賢次 (1977). 「清原宣賢系論語抄について—書陵部蔵「魯論抄」の本文の性格をめぐって—」. 『近代語研究第五集』.
- 坂詰力治 (1977). 「抄物の動詞について—漢語サ変動詞を中心に—」. 『近代語研究第六集』.
- 坂詰 (1987) 所収.
- 坂詰力治 (1984). 『論語抄の国語学的研究影印篇』.
- 武蔵野書院.
- 坂詰力治 (1987). 『論語抄の国語学的研究 研究・索引篇』.
- 武蔵野書院.

中田祝夫 (編) (1976). 『応永二十七年本論語抄』.

勉誠社.

(こばやし・しげゆき 人文学部日本文化学科助教授)

聖学院大学出版会の本

康仁徳・小田川興編著

北朝鮮問題をどう解くか

東アジアにおける平和と民主主義のために

(A5 判、税込価格 2940 円)

北朝鮮問題は、東アジアに大きな緊張と危機をもたらしている。核開発、拉致問題、食糧、燃料援助問題など、さまざまな問題が複雑に絡み、また歴史的な問題、国家体制の問題などが重なり、解決を難しくしている。この北朝鮮問題をめぐって南北、日米中口の六カ国による包括協議が進められている。しかし、この六カ国協議はこの地域に平和の新たな枠組みをつくることができるのか。また拉致問題はどのように解決できるのか。

日本は明確なビジョンを持ち、重要な役割を果たすことが求められているが、どのような解決の方向を提示できるのか。

本書は、元大韓民国統一部長官の康仁徳氏と元朝日新聞編集委員の小田川興氏を編者に、伊豆見元、小此木政夫、和田春樹、李鍾元、遠藤哲也氏など、朝鮮半島問題の専門家による論考を通して、これらの緊急かつ重要な課題に取り組み、平和的解決の筋道を検討するものである。